サイバー型いじめに関する意識調査 その3

—大学生におけるサイバー型いじめの実態把握—

○小野淳¹・斎藤富由起²・守谷賢二³・吉森丹衣子⁴・飯島博之⁵

千里金蘭大学¹・千里金蘭大学²・文教大学大学院人間科学研究科³・法政大学大学院人間社会研究科⁴・練馬区立総合教育センター⁵

キーワード：サイバー型いじめ・アウティング・トリックリー

Survey attitudes toward Cyber Bullying III

¹Atushi ONO, ²Fuyuki Saito, ³Kenji MORIYA, ⁴Taeko YOSHIMORI ⁵Hiroyuki Iijima

(¹ University of Senrikinran ² University of Senrikinran, ³ Graduate school of Bunkyo, ⁴ Graduate school of Hosei, ⁵NERIMA Educational Center

Key words: Cyber Bullying・Outing・Trickry

問題提起と目的

いじめ現象の第三のピーク期(尾木・渡部, 2007)において, 新しいいじめの形態として携帯やEメール, インターネット上の掲示板などを媒介とする「サイバー型いじめ」(Cyber Bullying)が注目されている(小野・斎藤, 2008; 小野, 2009). Belsey(2006)によれば「サイバー型いじめとは, 他者に害を与えることを目的として, 個人あるいは集団が意図的で, 度重なる, 敵対的な行動をとるために, Eメール, 携帯電話, ポケットベルのテキストメッセージ, (携帯電話の)インスタントメッセージ, 中傷的な個人ウェブサイト, オンライン個人投票サイトといった情報通信技術を使用すること」と定義されている.

日本におけるサイバー型いじめの件数はいじめ全体の約4%と報告されている(文部科学省, 2006). しかしサイバー型いじめの暗数は非常に多いと考えられ, 実態解明が急務と言える(渡部, 2008; 小野ら, 2009). さらにサイバー型いじめの防止には伝統型いじめの対処法では不十分と考えられ, サイバー型いじめの特徴を踏まえた対応の確立が求められる(小野・斎藤, 2008; 小野, 2009).

一般に, サイバー型いじめは「フレーミング」, 「ハラスメント」, 「サイバーストーキング」, 「デニグレーション」, 「インパーソネーション」, 「アウティング」, 「トリックリー」, 「エクスクルージョン」, 「ハッピースラッピング」に分類される(小野・斎藤, 2008; 小野ら, 2009; 小野, 2009). 小野ら(2009)は, このカテゴリーに基づいて日本におけるサイバー型いじめの実態把握を目的にサイバー型いじめの経験率を検証した. その結果, サイバー型いじめの経験率は10%を超えており, ハラスメント, フレーミング, アウティングの経験率が高いことが示された.

一方, 小野ら(2009)の課題としてアウティングとトリックリーの弁別性が指摘された. アウティングとは「被害者の了解なく個人情報をオンライン上に掲載する行為」であり, トリックリーとは「友人を装って被害者に近づき, 個人情報を聞き出して, オンライン上に掲載する行為」と定義されるが, 行為のカテゴリーとしては「個人情報の暴露」と包括できる(小野・斎藤, 2009). アウティングとトリックリーを同一カテゴリーとした場合, 学校非公式サイトに代表されるフレーミングより経験率が高くなり, 日本のサイバー型いじめの特徴と考えられる.

また小野ら(2009)および小野(2009)において学校非公式サイトはフレーミングとして分析されたが, 日本型の非公式サイトはチャット内の挑発行為以上に, 特定サイト内での迷惑行為に相当するハラスメントが妥当と考えられる.

そこで本研究ではアウティングとトリックリーを同一カテゴリーとし, 学校非公式サイトをハラスメントして大学生におけるサイバー型いじめの実態把握調査を行う.

方 法

調査対象者および調査項目：東京都および大阪府の私立大学生 298 名(男性 121 名: 女性 177 名. 平均年齢 20.51 歳. $SD=.84$)を対象に 8 カテゴリーのサイバー型いじめの経験(複数回答), 経験時期を尋ねた. またサイバー型いじめを誰かに相談したかを自由記述させた.

結 果

サイバー型いじめの経験率は 15.8%であり, 50 名弱が何らかのサイバー型いじめを経験したと報告した. 最も経験率の高いサイバー型いじめは「ハラスメント」(45%)であり, 次いで「アウティング&トリックリー」(21%), フレーミング(12%)であった. 悪質な犯罪行為である「ハッピースラッピング」に増加傾向が見られた. 全体的な相談率は先行研究と同様に約 30%で, 相談先は保護者, 友人, 教員の順であった.

考 察

本研究においても 1 割以上がサイバー型いじめの経験を報告しており, サイバー型いじめの浸透が示唆される. その内訳は「ハラスメント」が最も多く, 「アウティング&トリックリー」も高い経験率を示した. 先行研究(小野・斎藤, 2008; 小野ら, 2009; 小野, 2009)を踏まえて考察すると, 日本のサイバー型いじめは学校非公式サイトや他者を誹謗するような迷惑チェーンメールなどの「ハラスメント」が最も多く, 次いでプロフなどに他者情報を暴露するような「アウティング&トリックリー」の経験率が高いとまとめられる.

他方, 日本のサイバー型いじめ対策は, 基本的に地方自治体を中心に行われている(小野・斎藤, 2009)が, その対応は「学校非公式サイト防止」が中心となりつつあり, 被害者の回復過程に注目した対応は乏しい. 約 70%がサイバー型いじめを誰にも相談していないを踏まえると, サイバー型いじめの被害感情の実態は明らかにされていないと考えられる. 今後の課題としてサイバー型いじめの防止と同様に, 被害者の回復過程に関する実証研究が必要となるだろう.

引用文献

文部科学省 2006 平成 18 年度 児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査.

尾木直樹・渡部樹里 2007 教育再生会議のいじめ対策と学校 子どもの権利研究, 11, 16-21.

小野淳・斎藤富由起 2008 サイバー型いじめの理解と対応に関する教育心理学的展望 千里金蘭大学紀要, 5, 49-60.

小野淳 2009 サイバー型いじめに関する意識調査 子ども学研究, 1, 120-133.

小野淳・斎藤富由起・守谷賢二・吉森丹衣子・飯島博之 2009 サイバー型いじめに関する意識調査 その 1 日本心理学会第 73 回大会発表論文集.

渡辺真由子 2008 大人が知らないネットいじめの真実 ミネルヴァ書房.